

存在論と政治学

—ハイデガーによるアリストテレスの理解、誤解、超読解

中畑正志（京都大学）

0 以下での報告に確実に含まれるバイアスを予告するために、私はハイデガーの熱心な読者でも、よい読者ではないことを最初に断っておく。なぜそうなのかは、以前少し書いたことがある¹ので詳しくは繰り返さないが、要するに、大学入学当時に出会ったハイデガーは、私にとって哲学のあり方の反面教師的存在だったのである（だから報告の依頼を受けたときには、このフォーラムも懐が深くなったか、あるいは万策尽きたかのどちらかだろうと思った）。そして今回この報告のためににわか勉強をして、あらためてやはりソリが合わない哲学者であることを確認した。

実は、私が同様によい読者でも好意的でもない哲学者に西田幾多郎がいる。以前、請われてやむをえず「場所の論理」なるものの出発点となったとされるアリストテレスの読解を、西田がアリストテレスのどの訳を用いて、またどんな解釈を参考にして（アリストテレスの思考とは根本的に異なる）「場所の論理」なるものに導かれたのか、といったことを西田の蔵書その他や講義録などを参考に実証的に論じた（中畑 2011）。西田の研究者たちからはさしたる反応はなかったが、西田の場合こうした実証的研究は手薄のように見えるので、意味があったのではないかといまでも思っている。

しかしハイデガーについては事情が異なる。ハイデガーのアリストテレス読解については多くの資料がアクセス可能になったこともあって、論ずる材料には事欠かない。事実私のような門外漢にも、ハイデガーの研究者たちによる内在的で実証的研究が大いに進んでいることがわかる²。この面からも私が貢献できることはあまりないかもしれない。

こうした不安を抱えながらもハイデガーのアリストテレスの読み方を少し調べてみると、外野から発言すべきこともいくつか残っていると思われた。第一は、ハイデガーのアリストテレス読解をハイデガーから距離をとって再検証することである。ハイデガーのアリストテレスの読解は、彼の古代哲学全体に対する解釈の重要な基礎となっている³。そしてその古代哲学の解釈は、一部の哲学者たちの哲学史観にも少なからず影響を与えている（現前性の形而上学、あるいは内なる心による外的世界の表象という認識論中心の問題の設定、等々）。とすれば、現代にもある程度浸透している哲学史観がアリストテレス読解からどのようにして導き出されたのかは、自分の目で確かめるのは有意義である。第二は、ハイデガーにとっての古代哲学者たちと古代哲学研究者のそれとの隔たり、さらにはハイデガー研究者と古代哲学や古典学の研究者との間の断絶という事実の確認である。これは、ハイデガーとアリストテレスないし古代哲学との関係をまともに考えようとするなら、認識しておくべきである

1. 中畑 2000. 補足資料 1 を参照。

2. Kisiel1993 をはじめとした研究がそうであるが、この報告をまとめるにあたっては、細川 2000; 小野 2010; 斎藤 2012; 阿部 2015 から多くを学んだ。

³たとえば、ハイデガーのプラトンの真理概念批判は、ハイデガーのアリストテレス解釈に基づくものであることを、Berti 2005 は指摘する。

う。こうした断絶が存在しないようなふりをして対話や比較などを試みたところで上滑りの議論になるだけであろうから。

以下は、「ハイデガーのアリストテレス」はどのようなアリストテレスだったのかを私なりにテキストに照らして確かめた結果の報告である。その確認結果の報告が、多少挑発的であったとしても、ケンカを売ろうと言うわけではない。いやむしろ、社交辞令的なやりとりをするより仲よくケンカしたいと思っている。そのためにも、とりあえずハイデガーの解釈について率直なところをお伝えする。なお、報告の表題には「理解、誤解、超読解」と掲げたが、このうち、私の報告の中心となるのは「超読解」である。「誤解」と「理解」については簡単にすまざるをえない（論述の都合上「誤解、理解、超読解の順に論じる」）。

また言うまでもなく、ハイデガーのアリストテレス解釈を全面的に検討する力も暇も私にはないので、アリストテレスのテキストが比較的詳しく論じられている初期の著作

『アリストテレスの現象学的解釈』（GA61 1921–22夏期）

『存在と論理に関するアリストテレスの精選論文の現象学的解釈』（GA62 1922夏期）

『アリストテレスの現象学的解釈（解釈学的状況の告示）』（「ナトルプ報告」GA62 1922秋）

『アリストテレス哲学の根本諸概念』（GA 18 1924夏期）

『ソフィスト講義』（GA19 1924–25冬季）

などを材料に、とりわけ『アリストテレス哲学の根本諸概念』を中心に論じる⁴。

I 誤解

1. 私が「誤解」と呼ぶのは、古典学者たちにとっては受け入れがたいハイデガーのテキストの読み方のことである。ハイデガーの古代哲学や古典文献の読み方に対する古典の研究者たちの態度を一般的に述べるなら、次のようになる。「プロフェッショナルな古典学者は、ギリシアの哲学者と詩人についてのハイデガーの仕事にまったくといっていいほど関心がない」「古典学者はハイデガーのことなど相手にしない。相手にする少数の者もたいてい嘆かわしく思う」。—これは私の評価ではない。ハイデガーの古典ギリシア文献解釈にも何らかの意義を認めようと主張する例外的な論文 (Most 2002) の報告である。

ハイデガーに対する古典研究者の態度について、この現状認識は基本的にただしい。ハイデガーが言及する古典的テキストはある範囲の哲学の文献と一部の悲劇などに限定されているが、古典学者たちがそれに注意を払うことはほとんどない。哲学の文献についてはもちろん例外があり、英語圏ではハイデガーの読解への関心は希薄だが、フランスやイタリアでは主としてアリストテレスに関連してハイデガーを論ずる古代哲学研究者も存在し、そしてドイツ語圏では一部の研究者たちがハイデガーを相手にしている。しかし、具体的なテキストの解釈を問題とするとき、ハイデガーの解釈はほとんど顧慮されないということも事実である。

2. 追い打ちをかけるようだが、先の論文がハイデガーの読解に一定の意義を認めるのは、その読み方がただしいとか説得的だからというわけではない。著者は、ハイデガーがしばしば「ギリシア人は〜と考えた」といった形で言及する「ギリシア人」理解⁵の特異な性格を指摘したうえで、そのギリシア

4. 邦語訳については、創文社版『ハイデッガー全集』および高田珠樹訳『アリストテレスの現象学的解釈——存在と時間への道』に準拠しているが、若干の変更をおこなったところもある。

5. これから検討する『アリストテレス哲学の根本諸概念』の第一部第一章にもそうした表現が頻出す

人が実際にはギリシア人ではないからこそ興味深い、という。「ハイデガー的ギリシア人」の特異性は、以下での報告にも関係するので、列挙しておく。

(1) ハイデガーの古代ギリシア文献の使い方は、神父や牧師が日曜の説教の時に聖書を引き合いに出すやり方に比せられる。そうした文献はいわば異教徒にとっての福音書である。

(2) ハイデガーのギリシア人は重要な哲学用語の辞書の話し手である。ハイデガーがギリシア語の一つの著作の全体を解釈することはなく⁶、短い章やセンテンスを問題とし、長いテキストを小さな部分に分割することや断片として伝えられているテキストを好み、とりわけ好んで解釈するのはギリシア語の単語である。ハイデガーは一貫して、全体より部分を、部分より断片を、文より単語を好む。

(3) ハイデガーにとっての「ギリシア人」とは限定された一部のギリシア人（ホメロスからアリストテレスまでの一部の著作家）である。ハイデガーは古代ギリシアの歴史、戦争、経済、政治、料理、スポーツ、奴隷、家族、女性、子どもに関心を示さない。彼が取りあげるのは、哲学と一部の文学であり、喜劇やエピグラム、歴史、恋愛詩、弁論、科学や医術のテキストは扱わない。哲学も、ヘレニズムおよびローマ期の哲学はほとんど言及されない。

(4) ハイデガーのギリシア人とはニーチェのギリシア人である。ハイデガーが重視するのはニーチェと同じギリシア人である。例外はソクラテスである。おそらくソクラテスは、モノローグ的で反プラトンのようなハイデガーにとって、あまりに対話的であったか、あるいはプラトンと分けることがむずかしかったのであろう。

(5) ハイデガーのギリシア人はトガを着たドイツ人である。ハイデガーのギリシア人は、実際にはドイツ的美徳の理想化された投影であり、またその理想化の発想の源は究極的にはローマ的である。

これだけ述べた上での Mostの最終評価は次のようなものだった。—ハイデガーのギリシア人がわれわれに興味深いのは、彼らがギリシア人だからでなく、ドイツ人であり、ハイデガーのギリシア人だからなのだ。あるいは、他の代表的なドイツのギリシア愛好者のなかでハイデガーが際立っているのは、古代ギリシアのテキストの摂取の熱心さであり、その熱心さを多くの読者、とりわけ古代ギリシア語の知識をほとんどないしまったくもたない読者に伝達する能力である⁷。……

II 理解

3 私が「理解」と呼ぶのは、ハイデガーの解釈が正当であると思われる場合というよりも、ハイデガーの読み方に含まれている視点ないし問題意識がアリストテレスを読む上でも重要であるような場合のことである。具体例を挙げると、たとえば『存在と時間』33節との背景にある『ソフィスト講義』

る。

6. これに対しては、講義録であるが『ソフィスト講義』ではプラトンの『ソピステス』、『古代哲学の根本諸概念』ではプラトンの『テアイテトス』が全体として扱われていることなどを例外として挙げることができるだろう。

7. ハイデガーのこの素晴らしい伝達能力をよく物語るのは、ハイデガーと当時の代表的古代哲学研究者ウェルナー・イェーガーによるアリストテレスの同一箇所を読解を聞くという僥倖に恵まれたレオ・シュトラウスの感想である（Strauss1989: 22）。シュトラウスにとって、哲学テキストに対するハイデガーのような真剣で、深く、集中した解釈は聞いたことがなく、イェーガーの読み方などまったく比べものにならないものだった。もちろんシュトラウスは「古代ギリシア語の知識をほとんどないしまったくもたない読者」ではない。それどころか、周知のように、ギリシア語で書かれていること以上（以外）のことをたっぷり読みとる特異な読解能力をそなえた読者である。

および『アリストテレス哲学の根本諸概念』におけるロゴスと真理性にかかわる議論である。そうした議論を、アリストテレスのほうにひきつけて、そして明らかにハイデガー的な装飾を取り払ってまとめれば、(i)「ロゴスは何かについてのロゴスである」というプラトンの『ソピステス』での規定とアリストテレス『命題論』の言明の理解、さらに『魂について』第三卷第三章でのロゴス、思惟やドクサ、感覚知覚の考察とを関係づけている、(ii)そのようなロゴスをめぐるアリストテレスの思考に、ロゴスはそもそも世界のあり方とかかわるものだ、という視点を見出し、またこの視点を魂の能力のあり方とも関係させて考察している。言い換えれば、心的状態や判断の成立と世界のあり方を独立別個の事象としてとらえたうえで、その間の関係・妥当性を問うという問題設定を拒否している。アリストテレスを近代の認識論的枠組で読むべきではない、ということになるだろう。

この議論は、ブレンターノが、アリストテレスを典拠としつつ、実際にはデカルトの大きな影のものとひねり出した志向的内在、そしてそこから派生した志向性の概念を、ある意味でアリストテレスに即して捉え直す手がかりを与えている⁸。また、アリストテレスの個々のテキストの読み取りだけに迫られていると、こうしたこういう大きな見通しはなかなか見えてこない。こうした視点あるいは問題意識をもちつつアリストテレスを読むことは、アリストテレス研究者にとっても意義があるだろう。それぞれのテキストについてのハイデガーの解釈には従う必要はないけれども。

III 超読解(1) —— ウーシアー

4 「超読解」とは、ハイデガーの読み方のある特徴を示すために間に合わせにつくった言葉である。これは、分類上は上記の意味での「誤解」に含めてもよいのだが、(i)「超訳」という、シドニー・シュルダンとニーチェの「日本語訳」で二度ほど流行ったことのある言葉から連想されるようなある読み方、という意味に加えて、(ii)アリストテレスが設けたいくつかの概念や理論の区別や仕切りを飛び越え、(iii)さらにアリストテレスの思考の筋道から逸脱している、という二つの意味で「超越的」である局面をも指している。

もちろんハイデガーは、自分の読み方が（その当時の）一般的な読解とは異なることは百も承知していただろう。「ナトルプ報告」の冒頭で、あらゆる「釈意」（Auslegen）が「視座」と「視線方向」「視野」を含むことが強調され、さらに「どんな解釈も、その視座と視線方向という点で、自分が主題とする対象を過度に照射せざるをえない」「そもそも事実自体を問い求めるなどというのは、それだけですでに歴史的ということの対象性格に対する誤認である」ことが断われている。

—なるほど、もっともな注意である。私も、ハイデガーのアリストテレスをめぐる「釈意」を検討するうえで、自分の読み方が「客観的」「事実自体」などと僭称するつもりはさらさらしない（そもそもアリストテレスのテキストをさまざまな解釈を参照しつつ読むことに腐心するなら、そうした気にはとてもなれない）。しかしハイデガーは次のように続けている。「ここにそのような「事実自体」が見当たらないからといって、これは相対主義や懐疑的な歴史主義であると推断するのも、同じ誤認の裏返しにすぎない。解釈で取りあげられるテキストの翻訳、とりわけ決定的な基礎概念の訳語は、具体的な解釈から生じたもので、そこにはこの解釈のいわば核心が含まれている。それらの造語は、新しがりゆえに作られるのではなく、テキストのもつ事柄の内実（Sachgehalt der Texte）から生まれたのである」（GA 62: 392）。

8. 中畑 2011 ではこのことに関連してハイデガーに言及した。またブレンターノとデカルトとの関係については、さらに中畑 2015 を参照。

以下の報告は、ハイデガーの積意がどのような意味で「テキストのもつ事柄の内実」から生まれたのかを検討することになる

5 ハイデガーのアリストテレス解釈の方向は、『アリストテレスの現象学的解釈』において「図式的な方向づけ」というかたちで提示されている（GA 61: 112）。

- 1 原理および原理的なものの問題（ἀρχή - αἴτιον）。
- 2 把握しつつ規定すること、および概念的に分節化することの問題（λόγος）
- 3 あるもの、およびあるの意味の問題（ὄν - οὐσία - κίνησις - φύσις）。

このうちで私の報告の中心となるのは、3、とりわけそのギリシア語で表示されている概念の連続である。この図式に続く議論が示すように、少なくともこの時期ないしこの講義でのハイデガーのアリストテレスに対する関心はとりわけ「運動の問題」であった（「生という根本現象を解明するさいには「運動の諸性格」がターゲットとなる」GA 61:114）し、またアリストテレスにおいては「ウーシアーはアリストテレス哲学の根本概念そのものの表現」（GA 18:22）と受けとめられているからである。そしてそのウーシアーの理解の基本的方向は、(i)ウーシアーの日常的用法との緊密な関係(ii)運動（キナーシス）との関係づけ、(iii) 現在性（現前性）と完成性（被制作性）の読み込み、という形にまとめることができるだろう。このどれについても、アリストテレスのテキストと照らし合わせると多くの疑問が浮かぶが、ここでは、『アリストテレス哲学の根本諸概念』を参照しつつ、(i)にすでに含まれている問題を指摘して、全体的な読み方の特質に触れる。

6 ハイデガーはアリストテレス哲学の根本概念としての「ウーシアー」とこの語の通常の用法との緊密な関係を強調し、「通常の意味」に含意されていた意味の顕在化としての「術語の意味」を読みとる。ハイデガーの言う通常の意味とは、財産や所有物、不動産（Vermögen, Besitzstand, Hab und Gut, Anwesen）などであるが、彼はこれらを「そのあるのいかににおける特定のあるもの」（Seiendes im Wie seines Seins）という奇妙な仕方でまとめて、そこに「あるもの」だけでなく「あるのいかに」が非主観的・付随的に意図されているとする。その「あるのいかに」とは「意のままになるという仕方で現にあるDasein」ことであった。

ウーシアーの術語的な意味の分析においても、この意味のDaseinが要の役割を果たしている。術語の意味は、含意的に意味されていた「あるのいかに」を主観的に示す。ウーシアーにも、「あるもの」Die οὐσία als Seiendesと「あるのいかに」に対応する「あるの特性」Die οὐσία als Sein. Die Seinscharaktere, Sein eines Seiendenの二重の意味が読みとられるが、前者であることが明らかと考えられている諸物体は、自然的なDaseinの自明性において本来の意味でウーシアーであると語られ（GA 18:28）、後者もそれが「現に」（Da）という意味での特性でもあるかどうかを問うことによって遂行され、後者のいくつかの意味の分析においてもこのDaseinの概念が鍵となっている。そしてこのDaseinというあり方から、運動との連絡などを経て、ウーシアーの術語的な意味がDaseinの意味である現在性（primär Gegenwärtigkeit, Gegenwart）と完成性（Fertigsein, die Fertigkeit）として確認される。

「ウーシアー」の概念をめぐって(i)から(iii)へと至る考察の鍵になるのは、「ウーシアー」とDaseinとの連携、ウーシアーのDaseinとしての性格づけである。

7 一方のDaseinという語彙がハイデガー的な（形式的告示における）術語用法として確立するのは、1923夏学期講義であるとされる（Kisiel 493）。だがすでに1920年夏学期講義『直観と表現の現象学』（GA 59）およびその講義後数週間以内に完成されたとされる（Kisiel 1993: 137）「カール・ヤスパーズの『世界観の心理学』に寄せる書評」では、生（Leben）のあり方を分析する上で鍵となるような役

割を果たしている⁹。とりわけ『直観と表現の現象学』では、Dasein（およびその合成語）が生（Leben）の生成、展開、変化として理解され、事実的な生の経験の内容と連絡し、またその歴史性が繰り返し論じられており、すでにハイデガー的Daseinおよび他のハイデガー的な諸概念の連絡をみることができ¹⁰。たしかに確立された術語的な用法とは距離があるにせよ、またその源泉はさらに遡りうる可能性があるにせよ、その萌芽といってよいだろう。

ただしこれらの著作では、アリストテレスへの言及は散見するものの、このDaseinの概念とアリストテレスとの関係は、なにも示唆されていない。ハイデガーのDasein概念の出所生い立ちについて私はほとんど無知だが、この概念の『存在と論理に関するアリストテレスの精選論文の現象学的解釈』での使用を見ても、その基本的な由来はアリストテレスの読解とは相対的に独立であるように思われる。

8 では、他方のウーシアーの概念は、こうしたDaseinの意味および意味の連鎖を包み込む器だったのか。古代ギリシア語を少し囁いたものなら、「ウーシアー」という言葉の意味として、所有物や財産などの「通常の意味」と「実在」「実体」「本質」と訳される哲学用語に分類される意味があることは承知している。しかしこの言葉を、Daseinという意味——たとえヘーゲルやハイデガーの術語の意味ではなくその「通常の意味」（たとえば生存や生活、あるいは「現にいること」など）であっても——で解すべき用例は、すぐには思い浮かばないのではないか。じっさい、最も語義説明の詳しい希英辞典は、この語のアリストテレスまでの用法を、いま挙げた財産などの「通常の意味」と本質などの「哲学的意味」に大別するだけである（この二つの用法の関係については、必ずしも明快な説明が与えられているわけではない）。ハイデガーがときに参照することのあるBonitzの労作『アリストテレス索引』（Bonitz, 1870）にも、Daseinに該当するような分類はない。

ハイデガーの思索とアリストテレス読解の経歴には、ウーシアーとDaseinとを結びつける内在的根拠があるかもしれない。だが、素人にはもっと安易な想像が許されるだろう。ハイデガーは別の辞書や辞典を頼りにしていたかもしれない。当時のギリシア語の辞書には、Daseinをウーシアーの語義として挙げているものも存在したからである。

Benseler 1891

οὐσία, ἴση. -ῆ, ἡ (ὄν, εἰμί), 1) die Wesenheit, das Wesen, Wesen und Begriff, Wirklichkeit. 2) poet. das Dasein, im Plur. die Lebensstage, Soph. Trach. 911¹¹. 3) das Anwesen, Vermögen, Eigentum, von mehreren auch im Plur.; ἀφανής Barvermögen; φανερά Grundbesitz.

9. とりわけ S.38 Was bisher da ist an verfügbarem, erkennbarem Leben, ist doch schon jeweils in verschiedenen Weisen des zum »Dasein« bringenden Verstehens und der begrifflichen Fassung »da«. の Dasein は、創文社版の邦訳全集において「ここでいわれている「現有」(Dasein)は、ヤスパースの謂う意味での「現存在」ではなく、ハイデッガーの意味での「現有」の現われ初めである。」と注記されている。

10. 同書の Dasein の最初の用例：Die Daseinswirklichkeit als werdendes, sich entwickelndes, die Gestalt änderndes, sich differenzierendes und eine immer reichere Fülle in sich verarbeitendes Leben tritt stetig mehr mit in den bestimmenden Gehalt der faktischen Lebenserfahrung und läßt immer deutlicher das gegenwärtige Dasein als eine Phase, Stufe oder Durchgangsstelle eines Gesamtlebens verstehen.

11. 諸訳は、”crying aloud upon her own fate, and her childless existence thereafter” (Jebb1902)、「ご自身の運命を思い、今後はこの家に我が子も住まうことのないのを嘆かれていました」（風間喜代三）、「ご自身の運命を、その上今後は御子からも見捨てられる家庭のことを、声を挙げて嘆かれました」（竹部琳昌）など。

Menge 1913/1965

οὐσία, ion. -τη, ἡ [εἰμί, ὄν, οὐσα] 1.a) Dasein (pl. Lebensstage); prägn. Wahrhaftes Sein, Wesen(heit), wirkliche Beschaffenheit, Wirklichkeit, Realität, Wahrheit b) Stoff, Substanz. --- 2. Vermögen, Besitz, Eigentum, Gabe.

Benselerにおいては、Daseinは術語的用法に相当する1)と通常的用法に相当する3)からは独立であり、Mengeでは、術語的用法に相当する1.a) Wahrhaftes Seinなどと一緒ではあるが、Benselerと同じく Lebensstageの意味を与えているから、相対的には区別されるだろう。すると、Daseinはウーシアアの「通常の意味」と「術語の意味」を繋ぐミッシング・リンクではないかなどと想像したくなるかもしれない。少なくともこのLebensstageという意味のDaseinは、ハイデガー的なDaseinの理解とはかなり異なるにせよLebenとの関わりを保持しているのも、もしかするとハイデガーはこうした語義説明にウーシアアの「通常の意味」と「術語の意味」を繋ぐDaseinという理解への支持を読みとったのかもしれない。

9 しかしウーシアアをDaseinと説明する語釈は頼りにしないほうがよい。ウーシアアの語義説明でのDasein、つまり具体的にはLebensstageという用法の典拠となるのは、ソフォクレス『トラキーニアイ』（トラキスの女たち）911である。写本が伝える読み方は、

910 αὐτὴ τὸν αὐτῆς δαίμον' ἀνακαλουμένη

911 καὶ τὰς ἄπαιδας ἐς τὸ λοιπὸν οὐσίας.

であるから、上記のドイツ語の辞書の意味に従えば、τὸ λοιπὸν οὐσίαςを「残りの日々の暮らしを」といった意味で読むことになろう。

しかしこの行は「この写本の読み方が間違いなくcorruptしている」（Jebb）ため、ほとんどの校訂者になんらかの工夫を強いる箇所であり、行全体の削除ないしοὐσίαςの他の語への読み換え、あるいはοὐσίαςを「財産」あるいは「家庭」といった意味に読むなどの対応がとられている。要するに、Lebensstageという意味を、そしてそれとの関連でDaseinという意味をοὐσίαに読む典拠とはなりえない。とすれば、他の辞書のように¹²、ウーシアアの基本的な意味は、財産などの「通常的」で経済的意味と本質などの術語的意味に集約されるのである。ウーシアアはそれほど簡単にDaseinを読み込める語彙ではないのだ。（ただし、ハイデガーを慰める情報もある。ハイデガーの以上の考察とは独立ではあるが、ウーシアアではなく、もとの動詞εἶναιに戻って考えるなら、彼の解釈の一部、とりわけ vorhandenseinとの関係は、当時の権威ある研究から一定の支持を与えることもできたかもしれないことを言い添えておこう。）

10 ハイデガーを離れて、アリストテレスのウーシアアの術語用法の背景について考えるなら、何よりも重要なのは、プラトンがこの語にその意味と重要性においてある飛躍を与えたことである。この事情については、別のところである程度論じたこともあるので¹³、ここではアリストテレスとの関係において重要な点だけを要約する。

12. Liddell et al. [1843] 1996 は、この問題の箇所のウーシアアを、「財産」などの意味の項に si vera lectio と付したうえで分類し、希独辞典のなかでもより詳しい Pape1849 は、同様に 1) das Vermögen, Eigentum と 2) das Wesen, das wahrhafte Sein に分類して、同箇所を 1)に分類し、das Hauswesen の訳を与えている。

13. 中畑 2013: 補注 E; 中畑 2015b; 中畑 2016 ほか。

現存する文献に依拠するかぎり、プラトン以前には、ヒポクラテス文書『術について』（前五世紀末）における四回の使用という可能な例外を除いて、ほぼすべての用例が財産などの「通常の意味」で使用された。これに対してプラトンは、「通常の意味」でも使用しているが、他方で次に見るような、術語的あるいは哲学的とってよい意味でこの言葉を使用している。その使用は、回数も飛躍的に多く、使用される文脈も、イデア論の提示など、重要な考察を展開する場面である。その使用例には、暫定的にまとめると次のような用法が認められるだろう。

(i) 特定のあり方ないし特性

(ii) 「～とは何であるか」という問いに応答するもの

(iii) 真にあるもの

「ある」の意味をかりに「～がある」の存在用法と「～である」の述定用法とに分けるなら、

(i)(ii)は述定的な「ある」を基本としている。とりわけ(ii)は、イデア論と直結する重要な用法である。Xのイデアとは、「Xとは何であるか」という問いに応答する「Xそのもの」「まさにXであるもの」であり、そのような言葉で表現されているからである¹⁴。(iii)の用法の少なくとも大部分においても、「～である」と完全に分離した「～がある」という存在用法ではない（と私は考える）。

11 アリストテレスのウーシアーの概念は、こうしたプラトンの用法、とりわけ(ii)を継承している。まず、いわゆるカテゴリー（述定の形態）の一つとしてのウーシアーの概念は、多く「実体」(substance)と（不適切に）訳されるが、個体や事物を意味するのではなく、「何であるか」という問いに対する答えとなるものを意味している。この論拠はいくつかあるが、わかりやすいものを一つ挙げれば、カテゴリーの一つとしてのウーシアーの表現方法であろう。Oehler 1984による網羅的な調査表にもとづいて計算すると、量や性質などの諸々のカテゴリーとこのウーシアーのカテゴリーを列挙する箇所において、当のカテゴリーを表わす語彙として「ウーシアー」も26,7箇所で見られるが、「何であるか」(τί (ἐστί)) が20箇所ほどで、それ以外には「(ある) これなるもの」(τόδε τι, τόδε) が15箇所ほどで用いられている。これは、他のカテゴリーが、それぞれ「どれだけ」「どのような」という疑問詞に対する答え（ないしアクセントだけを変えた不定詞）であるのと同様に、ウーシアーのカテゴリーは、「何であるか」という問いに答えるものであることを告げている¹⁵。そうしたウーシアーが人間やリンゴ、机などのいわゆる事物を指示するのは、われわれの言語使用と概念機構が、眼前のものや話題となっているものに対する「何であるか」に答えるものをそのように把握するからである。

このようなウーシアーの概念は、（プラトンのウーシアー(ii)がソクラテス的な問いへの応答であったのと同じく）『カテゴリー論』および『トポス論』といった対話問答にかかわる著作群において明確に提示されている。そしてこの用法は、『自然学』さらに『形而上学』などでのウーシアーにかかわる議論の前提となっている。

アリストテレスのウーシアーの概念は、通常のウーシアー概念に潜在している意味を独自の仕方でも読みとって形成されたのではない。それは、日常の言語使用とりわけ対話問答の実際に即して、そしてその言語使用に現われるわれわれの基本的なものの見方とそれに対応する世界のあり方を整理するために導入された術語である。したがってアリストテレスが解明しようとするのは、この言葉の意味

14. この経緯については、より詳しくは中畑 2018 を参照。

15. 「あるこれなるもの」と訳した「トデ・ティ」が眼前の個体・個物へを意味するのではないことについても、注 13 の文献を参照。

ではなく、それを使って彼が形を与えるものの見方と世界のあり方そのものである。そのかぎりでは、そこには何も隠されていない。

12 アリストテレスは、『自然学』では、以上のように確認されるウーシアーの概念を前提として、まず運動変化の成立の条件を明確化する上でこのカテゴリーの区別を使用する。他のカテゴリーにおける変化とウーシアーの変化（生成）とが異なる可能性が検討され、より一般的な運動変化の成立条件が析出される。しかし他方、この析出を通じて、ウーシアーの概念自体も『カテゴリー論』や『トポス論』などいわゆる「オルガノン」と呼ばれる著作群には登場しない形相／素材という対概念によって分析される。そして、『形而上学』では、この形相と素材という対概念からの理解を前提として、さらにウーシアーの「何であるか」を問いたす。

ここにはアリストテレスの知のプログラムがある。アリストテレスを学ぶ上での「オルガノン」、それを前提として展開する自然学（『自然学』と『魂について』などまでも含む）、そして「「自然学」の後に来るべき論考」としての「メタ・タ・ピュシカ」である。「オルガノン」という位置づけ、自然学のあとに学ばれるべき著作としての「形而上学」という名称は、いずれも後の編集者の手によるものであるが、アリストテレスの著作自身のうちに明確な根拠をもっている¹⁶。

13 これに対してハイデガーは、ウーシアーの「通常の意味」に非主題的に潜在する（とハイデガーが考える）Daseinの概念に依拠しつつ、アリストテレス『形而上学』Δ巻八章で挙げられるウーシアーのいくつかの語義の解釈を通じて、アリストテレスのウーシアーの概念に現前性と完成性という二つの特徴を見出す。

しかしこのあたりから、ハイデガーの解釈を追っていくのはいささか苦痛である。これはすでに「ナトルブ報告」などにも示されている解釈の路線なのだが、その路線の軌道にのるようにウーシアーを解釈するためには、参照する理由が不明確なテキストや概念を自在に駆使する必要がある。なぜ（現在性にかかわる）パルシアーという概念がもちこまれるのか。なぜ「ト・ティ・エーン・エイナイ」のエーンに過去からの来歴的な意味が読み込まれ、そこから完成性が導かれるのか、等々¹⁷。もちろんその背景には、『存在と論理に関するアリストテレスの精選論文の現象学的解釈』に見られるような、そして『アリストテレス哲学の根本諸概念』でもこれに続いて示されるような、『魂について』『形而上学』『自然学』『ニコマコス倫理学』の（ハイデガーにとっての）関係箇所についてのハイデガー独自の解釈という「裏づけ」があるのだろう。しかし私には、自らが考えるDaseinおよび事実的生の含意を、アリストテレスのウーシアーの諸義にかなり無理をして接ぎ木しようという作業にみえる。そのため、そこから導かれたウーシアーの「現在性」と「完成性」（被制作性）という性格の典拠と根拠は、かなり脆弱にみえる。

伝統的な存在論とされるものがこうした性格づけのもとに断罪されているのであれば、そしてその断罪にハイデガーの見方が貢献しているのであれば、この脆弱性は真剣に受けとめるに値するだろう。

16. ただし『形而上学』は、たんに「自然学」の後に来るだけではない。「オルガノン」と呼ばれる著作群のなかで提示した見解をより直接に引き受けてアリストテレスが考察を展開している局面もあるからである。

他方でハイデガーは、「メタ・タ・ピュシカ」という名称が示す「自然学のあと」という位置づけを、著作編集上の位置づけにすぎないという見方をしている（GA 62:11）。さらに『カントと形而上学の問題』（GA 3: 6-7）では、この名称が「著作の事実上の理解における困惑から生じたもの」と論じている。こうした見方も、ハイデガーの『形而上学』という書の使用の仕方に影響を与えているかもしれない。

17. もう少し詳しくは補足資料2を参照。

14 もちろんハイデガーのアリストテレスに対する態度は、その精確な理解をめざすというより、そもそも取りかえし（Wiederholung）であり、過剰照射（Überhellung）であり、解体的な遡行であり、脱構築的読解だったのだ。—こうした呪文のような言葉を唱えられれば、返す言葉はない。ただ次のような疑問が残るだけだ。その取りかえされ、過剰照射され、解体的に遡行され、脱構築されるアリストテレスとは、そもそも、すでにかつ大幅にハイデガー化されたアリストテレスではなかったか。その意味において、彼のアリストテレスとの対話はモノローグ的である。

もちろんいかなる読み手であれ、「ハイデガー」のかわりに読み手の名前が入る下線部分の形容を完全に取り除くことはできないだろう。しかしその形容をより希薄化し、読み手とその対象との距離を確保し、異なる思考に出会う可能性を確保するための一つの手だてが「文献学」と呼ばれるのではないか。そしてこの報告が検討した講義の冒頭で、この講義の目的がまったく哲学的ではなく文献学的なものであることを強調していたのは、ほかならぬハイデガーであった（ただしそれは、多くのことを前提とするハイデガー的文献学ではあったけれども（GA 18: 5-6））。

IV 超読解(2) —政治学

15 アリストテレスの設定したさまざまな思考の仕切りと秩序を超える超読解が、両者の間に具体的にどのような相違をもたらすのかを、「政治学」という知のあり方のうちに瞥見しておこう。

この話題を取りあげるのは、そこに両者の思考のある隔たりをよく見てとることができるからである。ハイデガーは、その初期著作にかぎっても、いままで見てきたようにアリストテレスの著作をあちこちから論じながらも、アリストテレスの『政治学』を取りあげることはきわめて希である。多少ともまとまった考察は、『アリストテレス哲学の根本諸概念』に見られるぐらいで、他の著作では、『政治学』第一巻第2章の「人間は自然本性においてポリスの動物である」という見解がしばしば言及されるにとどまるのではないか¹⁸。

私は（おそらく本来なら私に代わって報告しているのがふさわしい故神崎繁氏とは異なり）「不在」を論ずることを好まない。しかし、これはかなり目立つ不在ないし欠落である。アリストテレスにとって『政治学』は、（こちらはハイデガーが熱心に論じている）『倫理学』と地続きというだけでない。二つの書物はともに彼の考える意味での「政治学」という知を構成している¹⁹。ハイデガーもこの事情はよく理解していた²⁰。また、（1920年代後半以後の現実政治との関わりを別としても）（通常の意味での）「政治」がこの時期のハイデガーにとっても関心事であったことはたしかであろう²¹。にも

18. この点はまだ十分検証してはいない。GA 62: 317 の筆記録に『政治学』5巻と7巻への参照というだけの記録はある。

19. 私は新アリストテレス全集の『政治学』の解説（中畑 2017）において、アリストテレスにとっての『政治学』の位置づけなどについて基本的な理解の線を示した。

20. たとえばアリストテレスの倫理学と政治学について「倫理学は政治学に属している。われわれは倫理学と政治学にかんする別の現代的な概念は、ここでは、無視しなければならない。」（GA18:127）。ただし倫理学が政治学の一部であるということは、『ニコマコス倫理学』1094b11 についての独自の解釈にもとづいて否定する（GA 18: 68）。

21. Kisiel 2000 は『現象学的研究への入門』（GA 17 1923/24 冬学期講義）でのいつかの表現が当時の政治状況への言及でもあることをはじめとして、『アリストテレス哲学の根本諸概念』を含むこの時期のハイデガーの考察が当時の政治状況を背景としていると主張している。

かかわらず、ハイデガーにとって『政治学』という書は視野に入ってこなかった。彼の考えるアリストテレスおよび「政治(学)」と親和的ではなかったのだろう。

16 事実、『政治学』第一巻第二章での「人間は自然本性においてポリスの動物である」という見解も、「人間はロゴスをもつ動物である」という規定との関係で考察され、そしてこの場合の「ロゴス」の内実の解明は、『弁論術』という「共同相互存在」の書を中心に遂行されている。

ハイデガーによる「人間は自然本性においてポリスの動物である」という命題の考察自体には、「ロゴス」をrationaleと解する伝統への批判(GA 63: 27; GA 18: 13)、動物にとっての「音声」と人間にとっての「ロゴス」の類似と相違の分析など、興味深い論点が含まれているし、おそらくはこうしたハイデガーの議論に影響を受けているであろうハンナ・アレントやジョルジョ・アガンベンよりもアリストテレスに即した理解と言える部分もある²²。しかし、ハイデガーはこのロゴスをめぐる議論から出発して、『弁論術』を通じて『ニコマコス倫理学』へと向かい、そして(自然学の一部である)『魂について』へと彷徨し、最終的に人間のDaseinの解明のために『自然学』の動の議論へと移行する。ハイデガーの「超読解」は、自然学と政治学との〈類〉(ゲノス)における相違というアリストテレスの知の仕切りを易々と乗り越え、「『倫理学』から『政治学』へ」という知のプログラムの秩序を逆行する。しかし、ポリスをめぐるアリストテレスの『政治学』での議論は、そうした「ポリスの動物」の考察の埒外にあった。

17 アリストテレスは実践的知としてのプロネーシスと政治学ないし政治学とを同一の性向とし(『ニコマコス倫理学』第六巻第七章114b21)、ときには換言的に使用さえする(同書1141a20)。ハイデガーは、このような関係を、政治的な知をプロネーシス概念を通じて、日常的・事実的生へ、そして人間的なDaseinへと結びつける方向で理解している。そのようにして「ポリスに関わる事柄」(τὰ πολιτικά)としての「政治的なもの」は、そのようなハイデガー的な意味でのオントロジーへと回収されているようにみえる(「存在論的政治学」)。そうした思考のなかでのポリスは、(時代的にはかなりあとの講義からなのでハイデガーに劣らず文脈を無視した引用と思われるかもしれないが)、次のような言葉のなかに現われている。「ポリスは、ポロス、つまり軸棒なのであり、あるものにおいてギリシア精神に現われるすべてが特有の仕方ですその周りを回る場所なのである。」「ポリスは、都市でも国家でもなく、ましてや・・・よく引き合いに出される「都市国家」でもない。そうではなくてギリシア精神の歴史の場なのである。・・・こうしたギリシア精神の本質の場所において、次のようなすべてのものの統一が根源的に集成されるのである。つまり覆蔵されていないものとしての人間のうえへ現成し、こうして人間に対して、人間がおのおのある(Sein)においてそれを頼りにしつづけるものとして割り当てられる。」(『パルメニデス』GA 54: 133)。

18 このハイデガーの思考と読解には不在であるのは、当時のギリシア人(「ハイデガーのギリシア人」ではなく)の多くが現実に生きたポリスであり、そのポリスを具体的・制度的に分析し、そしてそのよりよい国制への現実的変革の可能性を検討したアリストテレスの『政治学』での考察である。アリストテレスは、この考察のために、数多くの(158と報告されている)ポリスの制度の調査報告を検討し、共同体のあり方についての先人たちの見解を批判的に検討した。現実のポリスは、成年男子だけでなく、女も子どもも奴隷も含み、法制度や民会をもち、経済活動を営む共同体である。アリストテレスはそのようなポリスを考察の対象として、望ましい「最善の国制」の理念を保持しつつ、現実の、そして歴史的なポリスのあり方を踏まえて、実際に「置かれた状況」なかで可能なかぎり善き

22. ハンナ・アレントやジョルジョ・アガンベンによるアリストテレスの「ポリスの動物」の理解に含まれる問題が Finlayson 2010 によって指摘されている。

国制を提示しようとした。いや、そればかりでなく、状況に制約されて「最善の国制」にさえ至らないとしても、逸脱した国制についてその種類や成立の考察にもとづいて、その変更や修正やあるいは崩壊からの保全を模索する。

ハイデガーも注目した政治的知とプロネーシスとを結びつけるアリストテレスの言葉は、彼自身にとっては、むしろ日常の実践に関わる（そして日々の躰や習慣づけ、教育を通じて養われる）プロネーシスもまた、立法、制度、共同体のあり方を含んだ意味での「政治的なもの」が浸透していることを告げるものである。このようなベクトルで「ポリス的動物」の命題とさらに『政治学』の全体とを読んだ近代人にカール・マルクスの名を挙げるができるだろうが、これはまた別の話である。

参照文献表

- Benseler, G. E., and Georg Autenrieth. 1891. *Griechisch-Deutsches und Deutsch-Griechisches Schul-Wörterbuch*. 9. verb. Aufl. / besorgt von Georg Autenrieth ed: B.G. Teubner.
- Berti, Enrico. 2005. "Heidegger and the Platonic Concept of Truth." In *Heidegger and Plato: Toward Dialogue*, ed. Partenie, Catalin, and Tom Rockmore.. Evanston, Ill.: Northwestern University Press. 96-107.
- Bonitz, Hermann. 1870. *Index Aristotelicus*. Berlin: G. Reimer.
- Finlayson, James Gordon. 2010. "'Bare Life" and Politics in Agamben's Reading of Aristotle." *The Review of Politics* 72 (1): 97-126.
- Kisiel, Theodore J. 1993. *The Genesis of Heidegger's Being and Time*. Berkeley, Calif.: University of California Press.
- . 2000. "Situating Rhetorical Politics in Heidegger's Protopractical Ontology 1923–25: The French Occupy the Ruhr." *International Journal of Philosophical Studies* 8 (2): 185-208.
- Liddell, Henry George, Robert Scott, Henry Stuart Jones, and Roderick McKenzie. [1843]1996. *A Greek-English Lexicon*. [9th] / ed. Oxford: Clarendon Press.
- Menge, Hermann. 1913/1965. *Menge-Güthling Enzyklopädisches Wörterbuch der Griechischen und Deutschen Sprache*. 19. Aufl ed, Methode Toussaint-Langenscheidt: Langenscheidtsche.
- Most, Glenn. 2002. "Heidegger's Greeks." *Arion* 10 (1): 83-98.
- Pape, Wilhelm. 1849. *Handwörterbuch Der Griechischen Sprache*. Braunschweig: Vieweg.
- Oehler, Klaus. 1984. *Airstoteles : Kategorien* (Aristoteles Werke in Deutscher Übersetzung ; Bd. 1, T. 1). Berlin: Akademie-Verlag.
- Strauss, Leo. 1989. *The Rebirth of Classical Political Rationalism: An Introduction to the Thought of Leo Strauss : Essays and Lectures*. ed. Thomas L. Pangle. Chicago: University of Chicago Press.
- 阿部 将伸. 2015. 『存在とロゴス：初期ハイデガーにおけるアリストテレス解釈』月曜社.
- 小野 紀明. 2010. 『ハイデガーの政治哲学』岩波書店.
- 斎藤 元紀. 2012. 『存在の解釈学：ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』法政大学出版局.
- 細川 亮一. 2000. 『ハイデガー哲学の射程』創文社.
- 中畑 正志. 2000. 「書評 「ハイデガー哲学の射程」 のペリフェリーにて--細川亮一『ハイデガー哲学の射程』を読んで」 『創文』 23-26.
- . 2011. 「アリストテレスは「場所の論理」に何か関係があるのか? (西田哲学--その論理基盤を問う)」 『アルケー』 19: 31-46.
- . 2011. 『魂の変容：心的基礎概念の歴史的構成』岩波書店.

- . 2015. 「志向性と意識——ブレンターノをめぐる覚書——」 『フッサール研究』 12: 132-158.
- . 2015b. 「移植、接ぎ木、異種交配——「実体」の迷路へ」 村上勝三編『越境する哲学：体系と方法を求めて』 春風社. 221-265.
- . 2016. 「個体と指示：アリストテレスは何を語り、何を語らないか(根拠・言語・存在).」 哲学雑誌」 131 (803):53-75.
- . 2017 「アリストテレス『政治学』解説」 『アリストテレス全集 17 政治学』 岩波書店
- . 2018 「イデア論はどのように成立したか」 『古代哲学研究 (METHODOS) 』 50: 3-35.
- 中畑 正志ほか訳. 2013. 『アリストテレス全集 1 カテゴリー論；命題論』 岩波書店

補足資料 1

大学へ入学した当時（1970年代後半）、私の周囲にはハイデガーに対する一種熱っぽい雰囲気があり、「入れ込んでいる」同級生も少なくなかった。私もおぼろげと『有と時』（という訳書名だった）を手にとったり関連する本を読んだりして、ある種の議論のスタイルには多少とも強くなったが、その重苦しさや不必要と思える難解さはどうも性が合わなかった。その訳書から学んだ最大の教訓は、「解題」の末尾に引用されていたゴットフリート・ベンという言葉だったかもしれない——「真理はそんなに長くはない」。（この言葉を座右の銘としきたつもりだが、自分自身のものも含めて最近目にする多くの論文の長大化傾向に、その意味を痛感する。）

そうした「ハイデガー的なもの」——と当時は思った——への反発は、平明で風通しのよいギリシア哲学（及びその研究のスタイル、そしてそれを体現していた教師）への憧れを倍加した。私は現在の専攻を選んだことを後悔していないので、一種の反面教師として、ハイデガーにも半宿半飯ぐらいの恩義はあると思っている。

そのうち学生の論文指導などの都合でハイデガーのテキストを開く機会もあり、あらためて読んでみるとそれなりに理解もできる。私の嫌悪と反発は、主要には、ハイデガーの哲学そのものよりも、それに独特の「重み」「意味深さ」を加味した解釈の傾向や、日本の「独創的」哲学や仏教的概念に結びつけたりする風潮に起因するものだったのかもしれない。というわけで警戒心はかなり薄れてきたが、いまでも学生時代の見方から完全に自由になったわけではない。

最近では、ハイデガーの思想とギリシア哲学、とくにアリストテレス哲学との関連性が、「ナトルプ報告」の発見や『ソピステス講義』などの公刊もあってますます明瞭となっているらしいことは、専門外の私の耳にも入ってくる。ハイデガーの哲学史への眼力に対する信仰は相変わらず根強いが、このような研究動向はさらにハイデガーをアリストテレス哲学の鋭い理解者として見る傾向を生み出しているようである。もちろん古代哲学研究者のなかにもギリシア哲学の解釈者としてハイデガーを高く評価する人々も存在する。けれどもその種の議論の多くは、むしろ私の微睡んでいた警戒心を覚醒させるものである。実際、一部のハイデガーの研究者がハイデガーと古代哲学との関係を論じるとき（たとえばそのような関係を重視して『存在と時間』を「構築」するような試み）、プラトンやアリストテレスについてのハイデガーの意図的とも思える強引な解釈をそのまま鵜呑みにするだけでなく、そうした確信犯的な牽強附会とも異質の、初歩的な誤りを見いだすたびに、私の眉は濡れるばかりであった。

